

©2020年6月

◎第1942回 定期公演 Cプログラム

■シベリウス

■交響曲 第1番 ホ短調 作品39 (約38分)

1899年に初演された《交響曲第1番》は、シンフォニックな絶対音楽の領域で独自の表現世界を切り開こうとしたシベリウスの出発点となった作品である。この交響曲はチャイコフスキーやボロディンの影響が指摘されることもあるが、幻想的でラプソディックな曲調の内に堅固な論理の糸を張り巡らせるなど、すでにシベリウスの個性は十分に発揮されている。ちなみにシベリウス最晩年の言葉によると、「柔軟で感傷的なチャイコフスキーの音楽に対して、自分の交響曲は『硬質』である」という。

《交響曲第1番》の初演は大成功を収めたものの、その後シベリウスは曲に修正の手を加えることにした。理由のひとつとして、1900年夏に举行されたヘルシンキ・フィルのパリ万博遠征公演を指摘する者もいる。同公演のメイン・プログラムに《第1番》が選ばれたため、急いで手直しされたのではないか、という見方である。しかし、シベリウスが曲の改訂について同公演と関連付けて語ったことは一度もない。

残念ながら初稿のスコアが紛失してしまったため、《交響曲第1番》の改訂の詳細については不明だが、修正によって第1楽章が拡大された一方、第2、第3楽章は逆に短縮されたことが分かっている。またオーケストレーションも見直され、初稿では控え目だったハーブの積極的活用が注目される。さらにタンブリンとカスタネットが取り除かれた代わりに大太鼓が加わったことで、全体的に響きが力強く引き締まったとみてよいだろう。かくして1900年夏、《第1番》の改訂稿（現行版）は交響詩《フィンランディア》とともにスウェーデンやドイツ、オランダ、フランスなどヨーロッパ各地で演奏され、シベリウスの国際的評価の確立に大きく寄与することになった。

第1楽章は、アンダンテ、マ・ノン・トロップの序奏部とアレグロ・エネルジコの主部からなるソナタ形式。序奏部で静かに登場するクラリネット・ソロの寂寞（せきばく）とした旋律の内に、交響曲全体の基本楽想が織り込まれている。第2楽章は叙情的な緩徐楽章。曲の後半における素材の巧妙な展開処理、劇的なクライマックスの構築がシベリウスらしい設計。第3楽章は、ソナタ形式の発想が取り入れられたスケルツォ。「幻想曲風に」

という曲想記号が付された第4楽章では、まず序奏部で第1楽章冒頭の旋律が力強く回帰した後、あわただしい動きを伴う楽想と長大な旋律が交互に現れる。やがて曲は終盤に向けて大きなうねりを形成し、焦燥感と悲壮感を漂わせながら劇的に高揚していく。最後は第1楽章と同様、孤独な世界へと消え入るように、2つのピチカートで静かに幕を閉じる。

作曲年代：[初稿] 1898年春から1899年初頭 [現行版] 1900年2月、または3月から6月にかけて

初演：[初稿] 1899年4月26日、作曲家自身の指揮、ヘルシンキ・フィルハーモニー管弦楽団 [現行版] 1900年7月1日、ロベルト・カヤヌス指揮、ヘルシンキ・フィルハーモニー管弦楽団

(神部 智)